鉄道エピソード②〈空知～室蘭／北海道炭鉱鉄道〉

なぜ空知の石炭を室蘭へ運んだの？

1882（明治15）年、幌内炭鉱の石炭を小樽へ運ぶために鉄道が開通したとき、岩見沢にはまだ駅もありませんでした。やがて空知のあちこちに炭鉱ができていくと、岩見沢は石炭を各地から集めて運び出す鉄道の中継地となりました。やがて空知の石炭は室蘭へ運ばれ道外へ、また鉄をつくるためにも使用されました。

◆岩見沢が鉄道の中継地になったのは？

岩見沢駅ができたころは、乗る人や荷物があるときだけ列車がとまる駅でした。やがて、北海道炭礦鉄道会社（北炭）は、夕張炭鉱や歌志内の空知炭鉱を開発しました。石炭を運ぶために、歌志内線（岩見沢～砂川～歌志内）、室蘭線（岩見沢～室蘭）、夕張線（追分～夕張）が開通すると、岩見沢は道央の鉄道を結ぶ中継地となりました。

石炭を積んで夕張線を走る「D51 320」

◆なぜ、室蘭に石炭を運ぶ必要があったの？

室蘭に石炭が運ばれるようになったのは、道外へ大量に輸送するためです。産炭地から平らな胆振の海岸を通って鉄道がしかれ、室蘭は石炭積み出し港として発展しました。

さらに、1907（明治40）年に日本製鋼所、その2年後に輪西製鉄場ができ、室蘭は「鉄のまち」として歩みはじめます。鉄や鋼をつくる原料炭として、空知の良質な石炭が必要になったのです。

室蘭を鉄のまちにした北炭の井上角五郎

◆石炭を運ぶ鉄道が室蘭港を発展させた

1872（明治5）年に港が開かれた室蘭は、函館から札幌を結ぶ「札幌本道」の重要な中継地でした。1892（明治25）年、岩見沢～室蘭間の鉄道ができたことで、室蘭港は、石炭の積み出しを開始しました。やがて、小樽港と同じように、道外や外国向けの石炭を輸出する港へと大きく発展しました。

もっと知りたい！「鉄道―室蘭市旧室蘭駅舎」

道内最古の木造駅舎「旧室蘭駅舎」

1912（明治45）年に建てられた旧室蘭駅舎は、道内最古の木造駅舎です。明治の洋風建築のおもかげを残す屋根や白壁、外回りに「がんぎ」とよばれる雪よけ屋根があり、国の登録有形文化財に登録されています。いまは、観光案内所として使われ、当時、鉄道で使われていた道具や備品、写真なども展示されています。

石炭を運んだ蒸気機関車「D51 560号」

1940（昭和15）年、苗穂工場でつくられた蒸気機関車。1974（昭和49）年まで道内各地を走っていました。2019（令和元）年、室蘭市青少年科学館で展示されていたものが旧室蘭駅舎の隣に移設されました。

室蘭市海岸町1丁目5-1　TEL:0143-23-0102（室蘭観光協会）　（室蘭観光協会提供）